

軽度知的障害児の「生きる力」の育成を目指して
～食物・植物の栽培活動と食に関する指導を通して～

土浦市立大岩田小学校 武藤 裕子

I 主題設定の理由

本校の知的障害特別支援学級（以下、ポプラ学級と表記）の4名は、時と場に応じたコミュニケーションをとることが苦手な児童が多く、交流学級では自分の考えや気持ちをうまく表現することが難しい。また「できた」という喜びや達成感を味わう機会が少なく、成功体験も少ないため、困難なことから逃げてしまう傾向があり自己肯定感が低い。日常生活で必要となる基本的な生活習慣についても身に付いていないことが多く、食事のマナーや正しい食習慣、衛生面、食に関する知識・技能等についても知らないことが多い。

以上のことから、実際の日常生活に結びついた実際の・体験的学習である生活単元学習を通して、自己肯定感を高めるとともに、食に関する基礎的・基本的な知識・技能を習得させ、児童が将来自立した社会生活を送るために必要な力、すなわち「生きる力」を育成することが必要であると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

食物と植物の栽培活動を通して、成功体験を積み、達成感を実感することで、自己肯定感を高めるとともに、将来自立した社会生活を送るために必要な「生きる力」となる「自分の役割を果たす力」「人と関わる力」「コミュニケーション能力」を育てる指導の在り方を探求する。また食に関する指導を通して、将来自立した生活を送るために必要な食習慣や知識・技能を身に付けられるようにする。

III 期待される成果

- 1 児童が食物や植物の一連の栽培活動に協力して取り組み、その活動を通して成功体験を積み、達成感を実感することで、自己肯定感を高めることができるであろう。
- 2 他者と関わる活動や場を設定することで、「自分の役割を果たす力」、「人と関わる力」、「コミュニケーション能力」が育つであろう。
- 3 食に関する指導を実際の・体験的に行うことで、基本的な食習慣や知識・技能が身に付くであろう。

IV 研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 知的障害のある児童の学習上の特性

知的障害のある児童の特性として、「学習によって得た知識や技能が断片的になりやすく、実際の生活の場で応用されにくいことや、成功体験が少ないことなどにより、主体的に活動に取り組む意欲が十分育っていないこと」、「実際的な生活経験が不足しがちであり、実際的・具体的な内容の指導が必要」等がある。このような特性を踏まえ、「将来の社会的自立に向けて日常生活や社会生活に必要な知識技能や習慣が身に付くよう指導する」や「生活に結びついた具体的な活動を学習活動の中心に据え、実際的な状況下で指導する」、「成功体験を豊富にし自己肯定感を高めるようにする」、「児童一人一人が集団において役割が得られるよう工夫する」等といった教育的対応が必要である。

(2) 「生きる力」を育成する「生活単元学習」

生活単元学習は、領域・教科を合わせた指導の代表的な形態であり、「児童生徒が生活上の目標を達成したり、課題を解決したりするために、一連の活動を組織的に経験させることによって、自立的な生活に必要な事柄を実際的・総合的に学習するもの」である。従って、生活の中から課題を見つけ、実際的・体験的な学習である生活単元学習に取り組み、将来の社会的自立のために必要な「生きる力」を育成することが、軽度知的障害児には、教育効果が高いと考えられる。

(3) 知的障害のある児童における食に関する指導

知的障害のある児童は、自分だけの力で食習慣をよりよいものにすることが難しいのが現状である。だからこそ、食に関する指導が必要であると言える。食に関する指導の手引でも、「障害のある児童生徒が、将来自立し、社会参加するための基盤として、望ましい食習慣を身に付け、自らの健康を自己管理する力や食物の安全性等を自ら判断する力などを身に付けることは極めて重要なこと」と示していることから裏付けできる。

2 仮説の検証方法

学習後に児童が書いた絵日記や感想（ワークシート）、朝の会や学習後のスピーチ、児童の直接観察、栽培活動終了後に児童に実施したアンケート（自己満足度と自己評価）を分析し、検証する。

V 指導の実際と検証

1 食物と植物の栽培活動

(1) じゃがいもとさつまいもの栽培活動

校長先生に畑の耕しや植え方等を教えてもらいながらじゃがいもとさつまいもの栽培活動を行った。さつまいもの芋苗を植える時は、ペアを組み協力してマルチを貼ったり、芋苗を植えたりした。6月下旬にじゃがいも、11月にさつまいもの収穫をした。初めての経験だったこともあり、じゃがいもやさつまいもがたくさん出てきた時には、「わぁ〜！」と歓声が上がった。収穫後の自分に点数をつけさせると、児童はそれぞれ200点〜10000点と即答したことからも、児童は達成感を実感することができたと考えられる。また、栽培活動の中で、観察と算数的活動（重さと数え方等）も行った。

(2) バケツ稲の取り組み

学校の前の水田でお米を育てているPTA会長さんの協力を得て、昨年度からバケツ稲に取り組み始めた。PTA会長さんに助言をもらったり、昨年の取り組みを随時振り返ったりすることで、C児は自主的にA児やB児に教えたり、作業を手伝ったりしながら率先して活動していた。稲刈りではペア活動を取り入れた。C児もD児も、A児とB児を引っ張って活動するとともに、自分から仕事を見つけ積極的に働く姿が見られた。粃摺り後、玄米を見たときに、児童は「お米だ！」と大喜びだった。

バケツ稲の栽培活動の中にも、観察視点を明示して観察活動を取り入れた。ものさしを使って背丈を測らせ数値化した後、測定した値と実際の背丈が視覚的にも認知できるように、背丈を紙テープで毎回明示し、その成長の様子をわかりやすくした。

(3) 花の栽培活動

A児が「お花を育てたい。」と話したことをきっかけに、「みんなでお花を育てよう」という計画が生まれ取り組んだ。普段は忘れ物が多いA児だったが4種類の種を自ら持参し、みんなで植えた。花が咲いた時には、みんなで喜び達成感を味わうことができた。

2 他者と関わる活動

(1) ペア活動

栽培活動の中に二人組になって活動するペア活動を設定した。ペアは、A児とC児、B児とD児で組ませた。主なペア活動は、「畑の畝作りとマルチ貼り」「稲を植えるためのプランター作り」「稲刈り」「調理学習」であった。普段は自分のことで精一杯のC児とD児であったが、ペア活動の時にはポプラ学級のリーダーと自覚し、A児とB児に積極的に声をかけ、教えながら取り組み、その力を発揮することができた。

(2) 校内の全職員とお世話になった方へのプレゼント

じゃがいもとさつまいもの収穫後、手紙を書いて、全職員とPTA会長さんにプレゼントした。何度か手渡すたびに、自分たちで考えた言葉を伝えプレゼントすることができた。数日後、お礼の言葉や手紙を頂き、児童は恥ずかしそうに笑顔を見せ喜んでいた。

3 食に関する指導

(1) 食のマナーに関する指導

食事のマナーが身に付いていなかったため、箸の持ち方、使い方、食べ方等について指導をした。良い例と悪い例を絵で提示したり、実際に担任がやって見せたり、30回囁むことを児童が実践したりすることで、マナーについて理解し実感できるようにした。その日の給食をポプラ学級で食べ実践した。一人一人マナーに気を配り、児童同士が声を掛け合っていた。ただ、日が経つと忘れてしまうため継続した指導が必要であった。

(2) 栄養に関する指導

栄養教諭をゲストティーチャーとして招き、食物の働きや栄養バランスに関する指導を行った。まずは、3つの栄養とその働きを知ること（黄…主にエネルギーのもとになる食品「ご飯・パン・麺」、緑…主に体の調子を整えるもとになる食品「野菜」、赤…主に体を作る食品「肉・魚」）、3色の栄養が揃った食事が良いということを理解することを課題とした。その際、その日の給食を取り上げることで、児童の関心も高まった。児童が食べ物カードを各栄養群に分類する際、「ごはん・パン・麺は黄色」、「野菜・果物は緑」、「肉・魚は赤」といったように黄緑赤のチームとして色分けを明示したことで、食物カードを分類することができた。牛乳や卵、ハム等については「卵は誰が産むかな？」や「牛乳は誰の体から出るかな？」等と栄養教諭がヒントを与えることで分類することができた。授業の最後に、栄養バランスクイズを行い、正解した児童には「栄養バランス認定証」を与え、達成感を実感させた。

(3) 朝食に関する指導

ポプラ学級の児童は、毎日欠かさず朝食を食べる児童と全く食べない児童がいたため、朝食の大切さ等を知り、毎朝、朝食を食べる意識を高めることを目標として指導をした。指導後、毎朝、朝食チェックを実施し、食べてきたものをワークシートに書き、さらに黄緑赤栄養に色分けをし、栄養バランスが良いかについてみんなで確認するようにした。その結果、A児とC児は何か一口でも食べてくるようになった。また、B児は緑栄養が足りない日が続いた後、「野菜ジュースを飲んできたよ。緑になる？」と話したり、C児は「餃子を食べたけど野菜と肉が入っていたから緑と赤だよ。」と話したりする出来事があった。このことから、朝食をとることだけではなく栄養に関しても認識が高まり、栄養バランスのよい食生活を実践しようとする態度が身に付いてきたと考えられる。

(4) 食に関する指導でお世話になった先生へのお礼

栄養教諭の先生に、お礼の手紙と収穫したさつまいもをプレゼントした。後日、栄養教諭から児童一人一人に内容が異なるさつまいものミニ知識が書かれたお礼の手紙が届いた。児童は手紙を通して人と関わることができることに喜び、そのよさを味わうことができた。

(5) 調理に関する指導

ポプラ学級で収穫したさつまいもと米を使って、スイートポテトとちらし寿司の調理をした。手順を明確に示し、自分たちで進められるようにした。ペア活動を取り入れわからない時には、ペアを組んだ友達と相談するようにした。C児とD児は、A児とB児の難しいところを手伝い、わからないことはペアだけではなくみんなで考えるようにしたことで、友達と協力するという意識を高めることができた。調理に必要なスキル（材料を量る、米をとぐ、炊飯器の使い方等）に関しては、安全面に配慮して児童自身に取り組ませた。調理後楽しく会食し、これまでの頑張りを喜び、達成感を味わった。

VI 研究の成果

1 自己肯定感の高揚について

児童の絵日記や感想、スピーチ、直接観察から、自分たちの力で最後まで取り組み、食べ物を収穫し調理して食べたり、花を咲かせたりすることができたという達成感とその喜びを実感することができたことがわかる。栽培活動終了後に児童に実施したアンケートでは、3人とも満足度が高く、各活動後の自分に高得点をつけたことから、児童は満足し、自己肯定感も高まったと考える。

2 自分の役割を果たす力・人と関わる力・コミュニケーション能力の育成

ペア活動を取り入れたことで、自分の役割を果たし、友達と協力して取り組むことのよさを実感することができた。C児とD児は下級生に教える経験を積み、リーダー的存在として自分に自信をもつことができ、自己肯定感をさらに強く感じることができた。また校長先生をはじめ全職員、PTA 会長さん、栄養教諭等多くの人と共に学習を進めたことで、児童の人と関わる力を育むことができた。

3 基本的食習慣と食に関する知識・技能の指導

食のマナーについては、時間が経つと忘れてたり、食事の場で実践できなかつたりしたことから、継続した指導の必要性を実感した。栄養に関する知識については、食べ物の栄養についてクイズを出すと黄緑赤で返答できたり、毎朝の朝食チェックでも黄緑赤の栄養面を自己採点できたりしたことからも、黄緑赤栄養に関する知識を身に付けることができたと言える。朝食については、これまで朝食を食べなかったA児とC児が毎日朝食を食べるようになった。特にA児は一口でも食べてこようとする習慣を身につけることができた。また、C児は自分で朝ご飯を用意して食べるようになり、食生活が以前に比べ改善してきたことがわかる。

VII 今後の課題

- 1 大人との関わりが多かったので、交流学級の友達との関わりへと広げていくこと。
- 2 学習した内容が定着するための振り返り学習指導の工夫。
- 3 食物や料理の名前を覚えられるようにするとともに、主食、主菜、副菜の学習や、偏食・成人病・肥満予防等を含めた食の指導へとつなげること。